様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２０３７

研究課題名（和文）ジェンダー・バイアスを克服する新しいダンス教育理論の構築と教師教育への応用

研究課題名（英文）New Dance Educational Theory to Overcome Gender Bias and Application to Teacher Education

研究代表者
三戸　治子（酒向治子）（Mito, Haruko）

岡山大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：７０３６１８２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、岡山の①小学校教員と②中学校保健体育科教員を対象として、ダンスのジェンダー・イメージ、態度（抵抗感と羞恥心）に関する調査を行った。
①の結果:ジェンダー・バイアスは根強く見られ、特に「創作ダンス」が女性らしいと思われる傾向にあり、過半数が抵抗感や羞恥心を抱いていることが明らかとなった。②の結果:①ジェンダー・バイアスについては根強く見られ、種目別にみると「創作ダンス」が女性らしいと思われる傾向にあること、また②抵抗感や羞恥心ともに中立化の傾向を示したものの、抵抗感や羞恥心を抱く教員が多いことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　中学校１・２年生のダンスの必修化を受けて、効果的なダンスの授業内容や指導法を検討するために、中学生や中学校教員のダンスに対する意識を明らかにすることは重要な課題である。筆者はこうした認識のもと、これまで教員と中学生の両方を対象にダンスに対するジェンダー・イメージや態度（抵抗感や羞恥心）に関する質問紙調査を2011年より継続的に行ってきた。本研究は、調査対象を小学校教員に広げ、またより広範な中学校教員への調査を行うことによって、より明確な実態を浮き彫りにすることに貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：　In this study, I conducted the surveys about the manner (a feeling of resistance and sense of shame) toward dance, for ①primary school teachers and ②junior high school physical education teachers in Okayama. As for the result ①, the gender bias was seen firmly, and " creative dance" tended in particular to be seemed as feminine. And also, it became clear that the majority had a feeling of resistance and a sense of shame. As for the result ②, gender bias was seen firmly, and "creative dance" tended in particular to be seemed as feminine. And though the data showed a tendency of the neutralization about a feeling of resistance and a sense of shame toward dance, there were many teachers who had the feeling of resistance and the sense of shame toward dance.

研究分野：舞踊教育学

キーワード：ジェンダー　舞踊教育　身体表現学　ダンス・イメージ

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本の長い体育教育の歴史の中で、ダンスは常に主流であるスポーツではないものとして周辺に追いやられ、「女性教員が女性生徒に教える＜女性らしい＞」特殊な領域として位置づけられてきた。こうした長年にわたるダンス教育の状況は、平成 24 年度の中学校男女必修化を契機に大きく変容しつつあり、ダンス指導に携わる男性教員の割合も急増していた（中村、2014）。その一方で、従来から指摘されてきた課題である男性教員の教材研究・指導法研修の実施・参加率が低く、ダンス指導に対して消極的である傾向は未だ続いており（中村、 2014）、特にダンス経験者が少ない教員の意識改革を含む教師教育の質の充実は喫緊の課題であった。

先行研究においては、男性のダンスへ消極的な姿勢を、ダンスの女性的なジェンダー・イメージと結びつけて語られる傾向にあった（秋葉、1982）。たとえば石井(1993)は 1990 年代初期に高校教員を対象に行った意識調査において、ダンス学習においてダンス=女性的というイメージを排除する課題があるとし、ダンスの女性的イメージが教員のダンス指導の妨げになっていることを示唆している。しかし、こうした結論は数量的検証および議論が不十分であるデータによって導かれていることが多く、理論根拠が脆弱と言わざるをえなかった。教員のダンス指導への消極性をジェンダー・バイアスに安直に帰結して説明することは、ダンスに関する教師教育の根幹を歪ませることにつながりかねない。教育現場の混乱を避けるためにも、より精緻な学術的見地からのデータ収集・分析が求められていた。

２．研究の目的

本研究は上述した状況を踏まえ、教員のダンスのジェンダー･イメージとダンスへの態度(抵抗感と羞恥心）との関連を徹底的に掘り下げて考察し、長年培われてきたダンス指導にまつわるジェンダー・バイアスの克服する新しい理論的基盤を構築することを試みた。

３．研究の方法

本研究では、主に（１）岡山県の現役小学校教員と、（２）岡山市現役中学校教員を対象にダンスに対するジェンダー・イメージ、態度（抵抗感と羞恥心）について質問紙調査を行い、考察を行った。研究方法の詳細は省略する。

（１）質問紙（4 件法）調査項目（①年齢、②性別、③教員歴、④ダンス指導経験年数、⑤教員養成機関において、ダンス実技を履修した経験の有無、⑥ダンス（一般）に対するイメージ、⑦－１．創作ダンスに対するイメージ、⑦－２．フォークダンスに対するイメージ、⑦－３．リズムダンスに対するイメージ、⑧．ダンス指導をすることへの抵抗感、⑨．ダンスをすることへの羞恥心。⑩．ダンスを指導する上で気づいた点（指導上の困難や問題等）に関する自由記述)。

（２）質問紙（5 件法）調査項目（①主要なスポーツ 12 種目（陸上・サッカー・柔道・ソフトボール・バスケットボール・ダンス・バドミントン・器械運動・バレーボール・水泳・野球・剣道）のジェンダー・イメージ、およびダンス種目「創作ダンス」･「フォークダンス」･「現代的なリズムのダンス」）に対するジェンダー・イメージ、②ダンスを指導することに対する抵抗感、③ダンスをすることに対する羞恥心）

４．研究成果

紙幅の都合上、上記二つの研究成果について、概略的に注目するべき点について述べる。

（１）研究１の結果を総合すると、以下の通りである。

①教員歴が比較的少ない小学校教員にとってダンスについてのジェンダー・イメージは中立の傾向にあるものの、女性らしいというジェンダー･バイアスは未だ根強く残っており、特に「創作ダンス」が女性らしいと思われる傾向にあった。

②教員歴が比較的少ない小学校教員が「ダンス（表現運動）」に対する指導への抵抗感や羞恥心など否定的な感情を抱く傾向にある。小学校教員の「表現運動」に対する苦手意識や抵抗感は数十年も前から指摘されてきた問題であり、本研究の調査結果は同様の傾向を示しており、是正されていないどころか、むしろ「表現運動に対する苦手意識から授業を避ける→授業を受けていない児童が大人になり、ダンス（表現運動）をまた避けるようになる」という負のループを形成しているようにすら感じられた。

（２）研究２の結果を総合すると、着目するべきは以下の通りであった。

①ダンスのジェンダー・イメージについて：

・ダンス全体では、（男女双方の）教員に、女性的というイメージが根強く残る。

・ダンスの種目（領域）別では、「フォークダンス」･「リズムダンス」に対するジェンダー・イメージは中立化傾向にあるものの、「創作ダンス」に特にイメージが残っている。

②ダンスへの態度（抵抗感と羞恥心）について：

・抗感と羞恥心ともに（男女双方の）教員が「どちらでもない」の中立化傾向を示していた。

・ダンスの種目（領域）別では、抵抗感・羞恥心ともに相関を示したのは「創作ダンス」であった。教育現場におけるリズムダンス（小学校では「表現運動」、中学校では「現代的なリズムのダンス」）の実施率が高まることによってジェンダー・バイアスが薄れたのに対し、表現系のダンスである「創作ダンス」の実施率は未だ低いことから、歴史的に根強い「ダンス＝女性ら

しい」というイメージが残っていると解釈できる。今後の学校現場や、教員養成課程において「創作ダンス」をどのように指導してくかが課題として浮上した。

全体として、ダンスの種目別にみると、「創作ダンス」に対する女性的なイメージが強いことが明らかとなった

（３）今後の研究課題について
①調査手法の検討：筆者はこれまで質問方法として評定尺度法を用いてきたが、3 件法、4 件法など実態を把握する上でどのような段階が適切であるについて未だ試行錯誤を重ねている。奇数段階であると回答が中心に偏る傾向があるものの、「どちらでもない」を省き 4 件法にした時は、わざわざ欄外に「どちらでもない」と書いた回答者もいるなど、強制的にどちらかに振り分けたところで、それが実態を反映しているのかについては疑問が残るところである。今後もどのような方法がより適切か見極めるべく、これまで行ってこなかった 7 件法も視野に入れながら、研究方法そのものも模索し調査を継続していきたいと考えている。
②過去のダンス経験との関係性：本研究では、教員の性別や年齢など基本的な属性のみ尋ねており、教員のダンスの学習経験について充分なデータをとっていない。しかし、ダンスへのイメージや態度は、教員のそれまでのダンス経験によって変容する可能性が高い。従って、過去の授業経験、教員養成課程でのダンス学習の経験や教師になってからのダンス指導経験との関連でより掘り下げた検討が浮き彫りとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3　件）
①酒向治子、森田玲子、川上暁子、日本の身体教育に LOD を用いることの意義―多様な動きの習得に着目して―、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、査読無、Vol. 169、 2018、pp. 57-64.
②酒向治子、平田麻里子、猪崎弥生、中学校教員のダンスに対するジェンダー・イメージ、抵抗感と羞恥心–A 市公立中学校保健体育教員を対象として–、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、査読無、Vol.166、 2017、pp.109-113.
③酒向治子、平田麻里子、猪崎弥生、小学校教員のダンスに対するジェンダー・イメージ、抵抗感と羞恥心について、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、査読無、Vol.164、 2017、pp.85-90.

〔学会発表〕（計　4　件）
①谷本竜一、酒向治子、教師の感性的な省察力に関する研究、日本教師教育学会第 28 回研究大会、2018
②酒向治子、竹内元、宮本乙女、猪崎弥生、ジェンダーの視点からみたダンス教育、日本スポーツとジェンダー学会第 17 回大会分科会、2018、中京大学
③酒向治子、岡山市が推進する『OKAYAMA!市民体操』について-地域協働による体操制作の試み-、日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会第 37 回全国創作舞踊研究会発表会（栃木大会）、 2017
④酒向治子、田中俊之、猪崎弥生、中学校教員のダンスに対するジェンダー・イメージ、抵抗感と羞恥心―A 市公立中学校保健体育教員を対象として　日本スポーツとジェンダー学会第 16 回大会、2017

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：猪崎　弥生
ローマ字氏名：Izaki Yayoi
所属研究機関名：お茶の水女子大学
部局名：基幹研究院
職名：教授
研究者番号（8 桁）：00176124

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：